Review:Yuichiro Habe, Ptolemaic Kingdom and the Eastern Mediterranean World

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-10-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 原, 賢治
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/284

ヨーロッパ文化史研究　第 16 号
（2015 年 3 月 31 日）

書　評

波部雄一郎著『プトレマイオス王国と東地中海世界 ― ヘレニズム王権とディオニュシズム』

原　　賢　治

I

本書は，ヘレニズム時代のプトレマイオス朝の政治文化や同王朝とギリシア人・ギリシア諸都市との関係を専門とする波部雄一郎氏（以下，著者）による研究書である。2011 年に関西学院大学に提出された学位論文をもとにしつつ，その後の著者の研究成果を踏まえて加筆・修正が施されている。

本書のようなアレクサンドロス大王死後のヘレニズム時代の諸王朝を中心的なテーマとして扱った専門書が本邦において発表されるのは久方ぶりである。訳書やアレクサンドロスないしアテナイに関連してヘレニズム時代を扱う著作は出されているが，プトレマイオス朝をはじめとする諸王朝であれ，諸都市であれ，ヘレニズム時代のみを考察の対象とする専門書が久しく現れなかったことは本邦でのヘレニズム史の研究状況の一端を明瞭に物語っている。これまでも当該期を専門とする研究者たちが多くの重要な研究を発表してきた。とはいうもの, 古代ギリシア史の中心である古典期アテナイ研究と比べるまでもなく，ヘレニズム史は活況のある研究テーマからは程遠かった。近年，欧米でのヘレニズム史研究の盛り上がりを受け，かつそれら諸研究を踏まえて，若手を中心に当該期の研究者が以前よりも増えてきている。本書はそうした新たな諸研究の先駆けとなるであろう。評者もまた当該期を専門とする研究者のひとりとして，このような本邦におけるヘレニズム史の研究動向の中で出された本書と著者の研究成果をまずは心より歓迎したい。

本書では序章の「本書の構成」（30–34 頁）という節や各章での小結，終章など著者自身の手で丁寧に要約がなされており，本来なら評者による概要の説明は不要であるかもしれない。とはいえ，本書を読む前に本書評に触れる読者のため，また論評の手がかりとして，以下最初に評者なりに本書の内容を要約し，紹介したうえで，評者が感じた若干の疑問等を論じてゆきたい。本書の構成は次のとおりである。

序章
第一部　前期プトレマイオス朝とギリシア世界
　第一章　プトレマイオス朝研究の視座
　第二章　初期プトレマイオス朝とギリシア本土の諸都市
　補論一　エーゲ海域におけるプトレマイオス朝権力の浸透
第二部　ディオニュシズムの形成
　第三章　プトレマイオス 2 世のプトレマイエイア祭典行列
　第四章　ヘレニズム君主とディオニュソスのテクニタイによる祭典文化
　第五章　プトレマイオス朝におけるディオニュソス崇拝の変容
　補論二　プトレマイオス 2 世による祭典行列の年代について
第三部　後期プトレマイオス朝とギリシア世界
　第六章　プトレマイオス 4 世による「40 の船」の建造
　第七章　プトレマイオス 4 世による「タラメゴス号」
終章

II　本書の内容

序章では，まずプトレマイオス朝を手がかりにしてヘレニズム王権の本質に迫るという目的が表明される。その上で，従来の前 2 世紀以降の王朝の衰退論が批判される中で，検討の手段として政治文化であるエヴェルジェティズム（恩恵施与）と，その基盤となるディオニュシズムが提示される。衰退と言われてきた中でも王による贈与行為は継続してきており，恩恵が王朝にとっていかなる意味があったのかが改めて問題とされる。同様に，恩恵の基盤となる経済力を文化とともに象徴するディオニュソスと王権の結び付けが，後期の王については衰退論の中で退廃的に意味づけられてきたことが批判され，ディオニュシズムという王権のイデオロギーとして見直す必要が主張されている。

第一部においては，プトレマイオス朝がギリシア諸都市から支持を得，支配を行うために，軍事的な直接支配からエヴェルジェティズムや人的ネットワークを用いて威信を重視した間接的な支配へと移行していった過程が論じられている。

第一章では，先行研究を批判的に紹介する中で，王朝とギリシア都市との関係の重要性とディオニュシズムが導き出される。従来の中央集権的な国制の理解や領土の喪失に着目した衰退論のため，パッチワーク的国家という王朝の性格とともに，内外のギリシア都市

との関係が論じられてこなかった。しかし，人材や支持基盤として都市との関係は王朝にとって重要であった。そして近年の研究動向から両者の関係の文化的な側面としてエヴェルジェティズムが提示される。贈与者である王朝については前 2 世紀以降の恩恵施与の継続が，都市からは謝意として王に対して君主礼拝が行われたことが指摘される。また，王朝の側でも自ら君主礼拝を創設し，その祭典での行列は都市を意識しつつ，王朝の経済力を象徴するディオニュソスと結び付き，ディオニュシズムが表れてくるとする。

第二章では，プトレマイオス 1 世から 2 世にかけての王朝の対ギリシア政策が考察される。プトレマイオス 1 世は「自由」をスローガンに掲げペロポネソス半島に勢力を拡大させたものの，諸都市に資金・穀物提供を要求したため，その支配は永続化しなかった。その一方で，再度進出したプトレマイオス 2 世は複合的な政策を用いる。息子を通じて影響力強化を目指し，新たにギリシア人の「協調」をスローガンに加えるとともに，1 世には見られない，政治的な利害関係のない諸都市への資金・穀物提供を行い君主としての威信を高め，支持を得る試みをした。さらにアテナイ出身者を登用し，アテナイを陣営に取り込みつつ，彼らの諸都市との関係も利用していた。しかし，クレモニデス戦争の敗戦で，軍事的行動ではなく経済的な支援に政策を変えるようになり，エヴェルジェティズムを基盤にした活動に移ったとされる。

補論一では，エーゲ海の諸島のコイノン（同盟）に対する王朝の支配の方法が考察される。王朝は公職者であるネシアルコスをコイノンの代表者としたが，諸都市の支持を得，自らを解放者として宣伝するため，支配という印象を薄める必要があった。そのため，ネシアルコスには元々諸都市との関係の深い人物を任命するとともに，都市内の紛争に対して，王朝が直接介入せず，王朝と関係の深い都市から第三者を外国人判事として派遣させて対応していた。これにより王朝は諸都市のネットワークをさらに緊密化し，支配強化を狙ったとする。

第二部では，エヴェルジェティズムなどのプトレマイオス朝の文化的政策の背景にあるイデオロギー，ディオニュシズムが王朝の支配においていかに機能したのかが論じられている。

第三章では，プトレマイオス 2 世により挙行されたプトレマイエイア祭の行列が考察される。著者は先行研究が行進の一面のみを見てきたと批判し，総体的に行列が王朝にとってもった意味を明らかにしようとする。とくに祭典の参加者と観衆に焦点が置かれ，行列が使節を派遣して参加した影響圏内の都市や同盟都市，軍隊の忠誠を確認する支配装置であること，アレクサンドリア市民が能動的に行列に参加し，観衆と行列が一体化するよう

仕組まれていたことが示される。その上で，プトレマイエイア祭でアレクサンドロスと同定され，シンボルとされたディオニュソスは，当時の崇拝の流行や音楽・演劇の守護神としての性格を背景に，プトレマイオス 2 世時代の内外の政治情勢の中で，軍事的功績に乏しい王が支配安定のための文化や富に基盤をもつ王朝のイデオロギーを喧伝するために利用されたとする。

第四章では，王朝により特別に保護されたディオニュソスのテクニタイ（芸人団）の役割が論じられている。王朝はギリシア人入植者に一体性をもたせるため，多くの祭典を創設・支援しており，そうした様々な祭典の演劇や音楽に関わり，とくに王朝祭祀で中核を占めるディオニュソスに関わるテクニタイを組織化し後援した。またエジプトのテクニタイは従来エジプト内での活動が注目されてきたが，組合員が個別の活動として地中海各地の祭典へと参加し，またアレクサンドリアでのプトレマイエイア祭では海外からもテクニタイが参加したことを指摘し，こうしたテクニタイの行き来が王朝を喧伝する役割を担った可能性を指摘している。

第五章では，プトレマイオス 5 世が王朝内ではじめて「エピファネス（顕現神）」と自称した背景から，前 200 年前後の王朝の政策が明らかにされる。従来はエピファネス自称の背景が王のファラオ化などエジプトの側面から考察されてきた。それに対して, 著者は, プトレマイオス 4 世以降ディオニュソスが王権のイメージではなく，王と直接同定されるようになったため，プトレマイオス 4 世とプトレマイオス 5 世の間に断絶は見られないとする。その上で，プトレマイオス 4 世治世からのディオニュソスの表象の変化の背景として，王朝の対ギリシア政策の変化が示される。王朝が贈与から学芸の守護者として影響力を保持する政策へと変わるなかで，王は学芸の保護者であるディオニュソスとして表われたるようになったと主張される。

補論二では行列の年代について，従来のような諸都市の祭典参加決議だけではなく，テクニタイを手がかりに確定の試みがなされる。テクニタイはプトレマイオス 2 世とアルシノエ 2 世夫妻による庇護を受け特権を認められていたために，行列の年代はアルシノエ生前の 271/0 年とする。その上で，アルシノエとの兄弟姉妹婚がギリシア人の価値観に合わないため，各地の使節が集まるプトレマイエイア祭ではアルシノエに関して沈黙を貫いたとして，祭典がもつギリシアに対する政治的宣伝の側面が強調されている。

第三部では，プトレマイオス 4 世が建造した 2 隻の船の再評価が行われている。両方の船舶ともに，従来は王朝の衰退期にあってプトレマイオス 4 世個人の嗜好による奢侈的な行為として解釈されたが，著者は衰退説を排しエジプト人との関係も含め王朝の文化的な

政策の中で造船の目的を検討し直す。

第六章では，巨大戦艦「40 の船」が検討される。この船は双胴船であり，大規模戦艦の造船は当時諸王国の趨勢からは外れつつあったが，「20 の船」を作ってきた王朝の海軍政策の延長上に位置づけられる。この船はセレウコス朝との戦いのために「20 の船」2 隻を使用して建造され，ラフィアでの勝利後，ディオニュソスの文様が描かれ，戦勝の宣伝と威信のシンボルとしてアレクサンドリアに置かれた。

第七章では，河川航行船，タラメゴス号が対象とされる。この船はマケドニアの王宮の建築様式に基づいて作られた移動する王宮のような構造をもつ巨大船である。建造目的が王の個人的嗜好ではなく王朝の政策にあった。船内のバッコスの間は，4 世が行ったプトレマイオス 1 世の歴代諸王との合祀とプトレマイス市を中心とするエジプト南部地域での王朝の影響力確保の手段の政策の一環として船が造船されたことを示す。他方，エジプト人の間は，王が各地の巡幸の際の現地エジプト人有力者との面会の場として作られ，当時の王朝のエジプト化の中でエジプト人に対しても文化により支配の徹底を意図していたと論じられる。

終章では，以上の内容がまとめられるとともに，序章のヘレニズム王権の追求という目的に関しては，ヘレニズム王権の「多元化」「多様性」といった性質が示されている。

III　評価および若干の疑問

以上，本書の内容を評者なりにまとめてきた。ここからは，本書の評価と若干の疑問点を明らかにしたい。

本書を一読しただけでも分かる特徴は，本書の研究がヘレニズム史の多くの分野に関する最新の研究動向を摂取し，プトレマイオス朝の王権のイデオロギーを明確に提示した点にある。ヘレニズム史の研究は 1990 年代以降欧米で大きな進展を見せてきた。たとえば，諸王朝については王権のあり方，とりわけプトレマイオス朝やセレウコス朝に関して在地の非ギリシア人と王朝との関係が見直され，非ギリシア系の臣民に対する王朝の配慮や彼らと協調した支配が明らかにされている。同じように，当該期に衰退したとされるギリシア人のポリス，都市もまた支配者である王たちとの関係や内部の社会・政治的状況に関して従来の評価とは一変している。しかし，冒頭で示したとおり，本邦ではこうした欧米でのヘレニズム史研究の進展とタイムラグがあり，日本語でこうした諸研究をまとまった形で参照することが難しい状況にあった。ゆえに本書は，プトレマイオス朝は言うに及ばず，

他の諸王朝や都市も含め，当該期の研究をする者が必読すべき文献となっている。

また，こうした形式的なこと以上に，研究内容に関しても著者の独創性は高く評価されねばならない。本書では多くの論点・視点に著者の優れた着想が出されているが，その中でも評価できるのがディオニュシズムという著者独自の概念設定である。著者はディオニュシズムにより，王権とディオニュソスが象徴する経済的な豊かさや文化との結び付きを衰退論ではなく，歴代の王に通底するイデオロギーとしてとらえ直す。その結果，文化と政治が密接に関連付けられる。エヴェルジェティズムによる贈与行為や文化的な活動が単なる贈与者の名誉獲得や富の誇示といった印象論ではなく，王権というより深い位層で論じられる。同様に，恩恵施与の場ともなったプトレマイエイア祭ならびにその祭典に参加したテクニタイが，内外に向けて広く王朝を喧伝し，秩序を与え，王朝の支配を支えた機能もディオニュシズムの下明確に位置付けられている。独創的な視点を設定したことで，以上のようなプトレマイオス朝のもつ独自の特質が総体的に浮かび上がってくる。

ただし，独創的であるがゆえに問題点も出てくる。まず，本書が王朝とギリシア人ないしギリシア都市との関係を考察対象とする以上，どうしても在地のエジプト人・エジプト社会との関係に関する分析が弱くなる。著者も不十分であり今後の課題となることを繰り返して強調しているので，簡単な疑問を呈するに留めておく。著者が明らかにしたほどにディオニュシズムが王権の中核的なイデオロギーであるならば，ディオニュソスがオシリスとの同定や祭儀でエジプトに関わることがある以上，ディオニュシズムも二元統治の原則を超えて何らかの形で王朝のエジプト人に対する対応と関わり得るのではないだろうか。ディオニュシズムのより明確な評価のために，この問題の解明が待たれる。

さて，本書の主題に関連して評者が疑問を感じたのが，本書のタイトルに掲げられ，かつ著者が追求する課題ともなっている「ヘレニズム王権」という言葉である。本書中では，この言葉がしばしばプトレマイオス王権と同義で使用されているように見える箇所が散見され，プトレマイオス王権とヘレニズム王権というこれらの言葉がもつ意味の違いが明確化されていない。実際，著者は冒頭でヘレニズム王権の本質に迫ることを目的とするが，すぐにプトレマイオス王権の独自性という問いを提起し直し，以後この問題を解明してゆく。そうした王朝の独自性を求める論の展開からは，当然のことではあるが，ヘレニズム王権が「多元的」であり，「多様性」をもつという結論が出てくる。しかし，著者が明らかにしたプトレマイオス朝の王権の在り方が視点も含め独自であるだけに，他の王朝とどれほど，あるいはどのように異なるのかが十分に比較検討されていない段階において，プトレマイオス王権はともかくとして，ヘレニズム諸王朝にもつながる王権の定義付けはま

だ難しいように思われる。

そのため，本書の結論を踏まえたうえで，従来の軍事王権的な理解との関連で他王朝との比較を念頭に置いた分析が求められる。たとえば，著者はプトレマイオス 2 世の軍事的功績の乏しさをディオニュソスの表象利用の背景として挙げ（143–144 頁），また，クレモニデス戦争での敗北が軍事によらない経済的な支援の政策への転換を促したと論じており（97, 99 頁），他王朝とは違い軍事的な功績の乏しさがプトレマイオス 2 世による文化的なイデオロギーを王権の中核にする選択に決定的な役割を果たし，ひいてはディオニュシズムの確立に至らしめたのか考察する必要があるだろう。あるいは，逆にこの問題は他の王朝の側から見ると，大きな軍事的功績があれば，プトレマイオス朝ほどに政治文化に傾注することはないのだろうかという問いになる。著者は軍事ではなく文化的な側面から王権を捉える研究上のパラダイムの転換が余儀なくされつつあると評価するが，この側面がすべての王朝の中心的な特徴となりうるのか，王権の確立期に軍事的功績を欠いたプトレマイオス朝のみの中心的な特徴となり，他の諸王朝に関しては一面を示すものに留まるのか，「ヘレニズム王権」という問題を考える上で今一度問い直す必要がある。

なお，ヘレニズム諸王朝の王権の軍事的な特質でとりわけ強調されるのが，配下にいる勢力を外敵から保護することで正統性を得る防衛的な意味での軍事的功績である。たとえば，セレウコス朝のアンティオコス 1 世がガラティア人討伐により小アジアでの権力基盤を固め，マケドニアで王権を確立したアンティゴノス 2 世をはじめとするアンティゴノス朝の諸王は外敵と戦い領土を保全することで王権を維持してきた[1]。これらの他王朝の状況を踏まえると，クレモニデス戦争においてアンティゴノス 2 世を「バルバロイ」とし，戦ったことは（92, 95 頁），こうした王権の軍事的な性格の表われともとれ得るので，プトレマイオス 2 世と軍事との関連の中で，この点に関しても検討があるとよかった。

最後に，王朝の恩恵施与に関して一言述べておきたい。プトレマイオス朝の諸王による贈与行為は，その継続が従来の衰退論に対する反証のひとつとして，また，プトレマイオス 1 世からプトレマイオス 2 世にかけての軍事的支援から食糧・金銭の贈与へ，そしてさらにプトレマイオス 4 世の祭典の後援中心といった流れで，王朝の政策がより文化政策を重視してゆく過程の一端をも物語る重要な証拠としても使われており，本書において重要な位置を占めている。ただ，そうした重要性にもかかわらず，説明が不十分であるように感じた。たとえば，クレモニデス戦争以後の王朝の恩恵施与に関する政策の変化として示

(1) アンティオコス 1 世： Sherwin-White, S. and Kuhrt, A., *From Samarkhand to Sardis*, London, 1993, pp. 32–34；アンティゴノス朝：長谷川岳男「マケドニアとローマ ― その対立の構図 ―」『歴史評論』，543 号，1995 年，37–50 頁，とくに 43–44 頁。

されるのは，アカイアに対する支援だけで，しかもその史料が提示されていない（97 頁，表 1 にも記載されていない）。また，冒頭では通説の批判として総数の提示とともにプトレマイオス朝をはじめとする諸王朝の贈与が前 2 世紀以降もあまり減らずに継続したとの指摘に留まるが，プトレマイオス 4 世の政策を論じる際に 2 世（21 例），3 世（11 例），4 世（5 例）の事例数が出され，プトレマイオス 4 世による贈与の減少の大きさが明らかにされる（197 頁）。ただし，著者はこの減少をギリシアの都市との関係からの後退と捉える見方が一面的であると批判し，上記のように都市に対する政策の変化として解釈する。とはいうものの，プトレマイオス 4 世の贈与に関して数の減少とギリシアとの関係の後退との関連を否定する著者の議論の進め方からして，また，贈与行為に様々な背景や目的があることが先行研究を踏まえ本書でも明らかにされている以上，単純な事例数の変動や維持だけでは王朝の衰退に関して否定も肯定もできない。実際に，著者が用いた諸王朝の贈与に関する史料集の編者のひとりブリングマンは，同史料集の刊行直前に，事例を挙げて諸王朝による贈与が前 150 年以降減少したことを示し，贈与が王たちにとって財政的負担であった可能性を指摘している[(2)]。そのため，本書の射程からは外れてしまうが，それぞれの王に関して贈与の数や規模，また，各贈与の目的の比較などを通じてより詳細に衰退や恩恵施与に関する政策の変化について論じることが望ましいだろう。

以上，拙い要約をしたうえに，的外れな疑問や指摘を呈してきた。しかし，こうした指摘は本書の価値をいささかも減ずるものではない。高い実証性と独自の視点により新たなプトレマイオス朝の国家像・王権概念を提示した本書は同王朝のみならず，ヘレニズム史全般に関して重要な寄与をなす研究であると言える。評者自身も大いに学ばせていただき，刺激を受けたことを記して書評を終えたい。

（2014 年 1 月，関西学院大学出版会，318 頁，2,800 円＋税）

---

(2) Bringmann, K., “The King as Benefactor”, in Bulloch, A.W. et al. eds., *Images and Ideologies : Self-Definition in the Hellenistic World*, California, 1993, pp. 7-24, esp. 11-12.